

研究集会「石器接合資料研究の諸問題」発表要旨

主催：科学研究費補助金新学術領域研究「ネアンデルタールとサピエンス交替劇の真相：学習能力の進化に基づく実証的研究」A01 班招待研究「北海道の旧石器時代石器群における石器接合資料分析をもとにした学習行動の復元」（代表：高倉 純）

後援：北海道旧石器文化研究会

プログラム

日程：2012年3月17日（土）

会場：北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟 W517 教室

12:30— 受付

13:00—13:10 趣旨説明

13:10—13:50 高倉 純（北海道大学埋蔵文化財調査室）

「石刃・細石刃剥離にかかわる接合資料分析」

13:50—14:35 長沼正樹（北海道大学アイヌ・先住民研究センター）

「両面石器の接合を考える—事例からみた可能性と限界—」

14:40—14:50 休憩

14:50—15:35 赤井文人（鹿児島市教育委員会）

「北海道後期細石刃石器群の接合資料分析—オサツ 16 遺跡出土資料を対象に—」

15:35—16:20 光石鳴巳（奈良県立橿原考古学研究所）

「サヌカイト製石器の接合資料研究」

16:20—16:30 休憩

16:30—17:10 佐野勝宏（東北大学大学院文学研究科）

「ヨーロッパにおける石器接合研究」

17:10—18:00 コメント・ディスカッション

石刃・細石刃剥離過程にかかわる接合資料分析

高倉 純

(北海道大学埋蔵文化財調査室)

石器の接合資料から学習過程を明らかにする手続きとして、これまでは割り手の同一性・一貫性が前提視され、微視的な遺物の空間的分布傾向の解釈が重視されてきた。しかし、そうした前提や解釈の成立は、どの地域・時期の資料においても期待できるわけではない。報告者は、北海道の白滝遺跡群で確認された石器接合資料の分析にもとづき、とくに石刃や細石刃の剥離過程にかかわる検討を進めてきた。接合資料での剥離方法と剥離工程に関する分析の結果、一連の剥離作業のなかには「転換点」があることを見出すことができた。原石からの一連の剥離過程は、そうした「転換点」によって分節された作業単位に階層的に整理することができる。そうした作業単位が相互にどのように関連して全体が組織されているのか、また作業単位はどのような「製作レベル」を示しているのかを明らかにすることで、母岩相互や石器群の比較に新たな視点を導入できることを指摘したい。

両面石器の接合を考える

—事例からみた可能性と限界—

長沼 正樹

(北海道大学アイヌ・先住民研究センター)

発表者はこれまで、ステージ2終末(約1万年前)の日本列島における両面石器の接合事例を研究してきた。作り手はサピエンスであろう。両面石器の一部には、接合資料から作り手の技量を評価できる可能性がある。

一方で北ユーラシアには、ステージ3(約6~3万年前)つまり作り手はネアンデルタールかもしれない両面石器が、広く分布する。もしも技量を評価できれば、ネアンデルタールとサピエンスとの間で、技量ひいては学習能力を比較できるかもしれない。

しかし運良く接合した資料からは多くの情報が得られるが、接合していない両面石器をどう扱えばよいのか。また接合資料が個人の連続動作や行為の反映なのか、一つの接合資料に複数の作り手が関与していたのかは不明だし、そもそも石器は、常に特定の形を目的に割られたとは限らない。また国ごとに考古学をめぐる社会的制度や、公表データの質も異なる。技量や学習能力を検討できる接合資料が、ステージ3の両面石器で公表されているのか、確認する必要がある。

北海道後期細石刃石器群の接合資料分析 —オサツ 16 遺跡出土資料を対象に—

赤井文人
(鹿児島市教育委員会)

北海道更新世末の細石刃石器群について、接合資料の分析を通して石器群の形成過程を考察する。検討対象は、忍路子型細石刃核を伴う石器群で北海道中央部石狩低地帯南部に位置するオサツ 16 遺跡である。当該石器群は黒曜石原産地から離れた、いわゆる石材消費遺跡として捉えることができる。北海道では、黒曜石原産地に位置する白滝遺跡群の調査・研究によって、旧石器時代における黒曜石原石の獲得から各種の石器製作・石器搬出の過程が、圧倒的な量と質の接合資料によって明らかにされつつある。一方、石狩低地帯南部では、細石刃石器群の遺跡が複数検出されており、各石器群の接合資料等の分析から石材消費地における石器の搬入から消費に至る過程が明らかにされつつある。本発表では、これらの分析成果を報告するとともに、細石刃核・搔器・彫器などの接合資料分析から明らかとなったツールの製作・維持管理及び遺跡内における遺物分布の空間分析についても言及する。

サヌカイト製石器の接合資料研究

光石鳴巳
(奈良県立橿原考古学研究所)

非可塑性の素材である石材を用いる石器製作には、しばしば製作者の意に沿わない「事故」や「失敗」が起こり得る。製作址にのこされた遺物をみると、そこには現代の我々の目からみても明らかに失敗や事故とみることのできる破損品がある一方、何故に廃棄されたのか理解に苦しむものもある。また、サヌカイトによる石器製作にはいわゆる石理（いしのめ）による制約があって、しばしば不規則な割れを生じた事例に遭遇する。

今回の報告では、縄文時代草創期の槍先形尖頭器製作址である、奈良県三郷町勢野東遺跡を主に取り上げる。ここでは、30 点以上の尖頭器が残されているが、その大部分は半損品や、部分的な破損によって放棄されたと考えられるものである。この石器群における接合資料の観察を軸にして、サヌカイトを用いた石器製作における「事故」について考えてみたい。

ヨーロッパにおける石器接合研究

佐野勝宏

(東北大学大学院文学研究科)

石器接合研究は、石器の製作方式、遺跡内の人の動き、遺跡間連鎖、に関する考古学研究のための有効な分析手法として用いられてきた。石器接合は、稀な例外を除き、人類史の極短い時間幅の中で完結するため、人類活動の共時性を保証する手段となる。また、接合資料には、石器製作時に採られた手順や方法に関する痕跡が残されるため、製作者の意図とそれを遂行する能力が間接的に推察される。

このような石器の接合という現象が我々にもたらす情報を利用し、近年ヨーロッパでは埋没後の遺跡形成過程や石器製作の技量差に関する研究に石器接合研究が応用されている。またさらに、石器接合を基にした異文化伝統の連鎖と断絶に関する研究にも利用され、その背景にある旧人ネアンデルタールと新人ホモ・サピエンスの交替劇に関する議論もなされている。発表では、近年ヨーロッパでおこなわれている石器接合研究を紹介し、石器接合研究の可能性について考察する。